

日本日時計の会会報
HIDOKEI 第9号

2012年12月

ひどけい

J S S

THE JAPAN SUNDIAL SOCIETY



湯島天神の日時計(文京区・東京)

- ・顧問 関口直甫
- ・会長 後藤晶夫
- ・副会長 押田榮一

- ・幹事 鷺見洋一
(会報編集)
- ・幹事 沖 允人
(カタログ・文献)
- ・幹事 小野行雄
(会員管理)

ひどけい 2012年12月 第9号

(目次)

役員組織・目次

2012年度日本日時計の会年次総会		1
西川原クラブ(老人会)で日時計を作る	光田淳雄	2
退職記念日時計展	小野行雄	3
オーストラリア日時計工房	沖 允人	4~5
オーストリア・ウィーンの日時計	沖 允人	6~10
パリの日時計	小野行雄	11~13
続 球形日時計	奥田治之	14~17
隅田川日時計散歩	小野行雄	17
追悼・澤路雅夫さん	沖 允人	18~19
追悼・山岸伸一さん	小野行雄	19
日本日時計の会会則		20
編集後記		

●本会入会について

入会ご希望の方は、上記の幹事会員・小野行雄まで、ファックスまたはメールでご連絡ください。

●会報への投稿について

原則として、WORDのデータにして小野行雄にお送りください。

*日時計カタログ情報に関しましては、沖允人にご連絡をお願いします。

2012年度日本日時計の会総会

第9回日本日時計の会総会が、2012年4月14日(土)13時より、上野の東京国立科学博物館小会議室で開催された。

総会は、幹事の沖氏が議長に選出された。なお、議題に先立ち、前回の総会以降亡くなられた3名(森本雅樹氏・澤路雅夫氏・山岸伸一氏)の会員の方々のご冥福を祈り黙とうを捧げた。

総会の議題は原案通り承認されたが、役割分担の件は、“現役員の話し合いで決定する”ということの一任された。

1). 出席者

会員総数 個人34名 法人5社

出席者 会員10名(+同伴者2名)

上原秀夫、沖允人、小山泰弘、横沢文雄、
後藤晶男、野呂忠夫、細谷一、森本せつ、
小野行雄・恵子、光田淳雄・幸子、(敬称略)

* 委任状送付会員14名

2). 審議事項

平成22・23年度事業報告(資料参) 承認

平成22・23年度決算報告(資料参) 承認

平成24年度事業計画案(資料参) 承認

平成24年度収支予算案(資料参) 承認

会員異動 入会 佐々木瑞穂氏
退会 藪 保男氏

3). 平成23年度会費徴収の件

平成23年度に関しては会の活動が休止状態であった為、会費の徴集はしない。

4). 研究発表・報告

・上越市飯小学校の日時計 細谷 一

・アナレンマ式紙日時計二種 上原秀夫

・ノルウェーの日時計 沖 允人

・日時計展報告(退職記念) 小野行雄

* 風変わりな日時計(資料のみ配布) 奥田治之

5). 博物館見学

博物館日時計コレクション見学

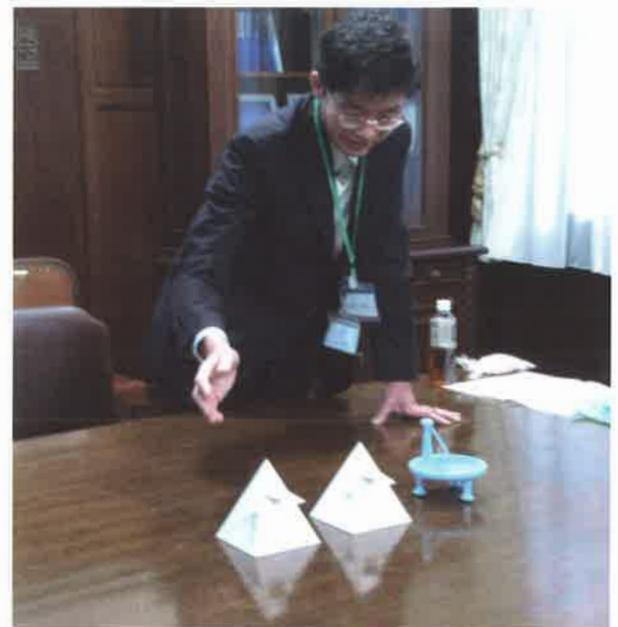
インカ帝国マチュピチュ展見学(希望者のみ)

* 17時総会終了

(小野記)



2012年度日本日時計の会総会



アナレンマ式紙日時計二種 上原秀夫氏

《日時計トレイル》

翌15日10時、博物館前に希望者10名が集まり、ここから御茶ノ水まで大名時計博物館や湯島など数か所の日時計を見学した。



小原銀之助氏制作の日時計の前にて(上野不忍池)

西川原クラブ(老人会)で日時計を作る

Sundial-workshop at Nishikawahara Club

光田淳雄 A. Mitsuda (岡山)

5月8日(火)、定例の第2火曜日、製作会を開いた。出席者は男子12名・女子10名、全員各個人で製作する。毎月のきめられた行事を済ませ、2時に日時計制作に入る。簡単に作り方の説明をして、印刷した厚紙を配布、写真のような2種類の製作にかかる。出来上がった見本を見ながら、はさみで外周を切り抜いてもらう。折り込んで形ができれば、木工セメダインで接着する。折り込むところは、あらかじめカッターナイフで浅く切り込みを入れていたので、平面型はすぐにできた。円盤型は円盤2枚を貼り合わせて、棒を通す。棒を北極星にむけると、円盤の面に、春分から秋分までは表面に陽があたる。秋分から春分までは裏面に陽があたる。

製作準備の過程でできた厚紙の切れ端で、写真のような日時計も作って、展示しておいた。いつものように、お茶とお菓子の時間になり、この間に、遅れた人、間違っただけ貼った人の手伝いをして、全員製作することができた。陽のあたる所でたしかめて、みんな喜んで持って帰った。

この日のために、2月14日(火)に”時“の話をした。一年・一か月・一日はどうしてわかったのか。時計がある今では考えたこともないようだった。

一日は、喜していれば分かるようだが、いつを一日のかわり時にするかと考えると、困ってしまう。歴史的には、夜寝る時か朝起きた時にしていたと話すと困った顔になる。昼の12時は太陽が南中することでわかるが、夜の12時に寝ていて、時計がないと、時の鐘もなく、決められなかった。

一か月は月の満ち欠けから、生活の基本だった。満月の夜に集まるが多かった。

一年は古代にもわかっていただが、エジプトあたりで、井戸の底に日が差し込む頃、一年の手がかりになった。ナイル河の洪水をシリウス星で見つけた話は有名である。

ユリウス暦からグレゴリオ暦になる時、春分の日が3月21日になるようにした。1582年10月5日から10日間を廃した。この10日の扱いが問題になった

のは有名である。

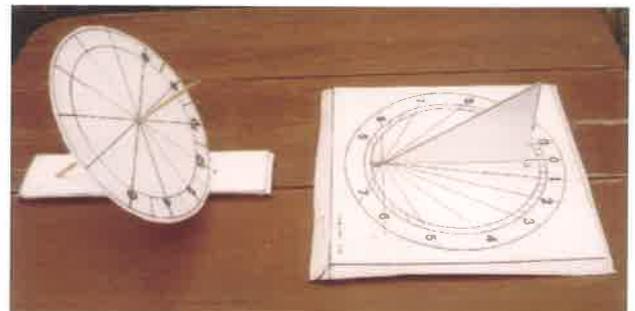


製作風景

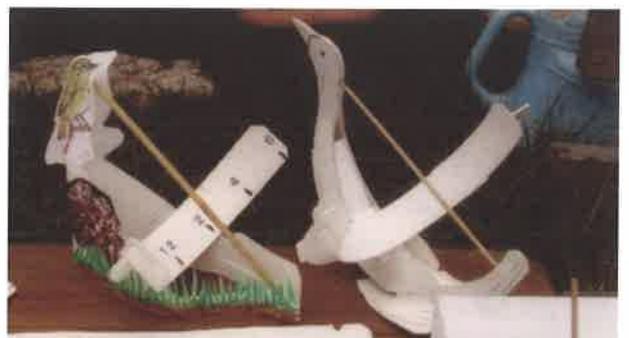
満月による一か月は早くから用いられたが、一年や一日とのつながりが無く、西洋では早くから、30日と31日にして、3月の初めに地球の公転と調整することになった。これが2月末の調整である。

中国などでは、今も旧暦を用い、閏月がある。日本でも漁業や農業などでは、上手に併用している。

今では時計や携帯をもって、100年前までは考えられないことだった。東北大地震のあと、時計も携帯も使えない時間があった。このとき、時計からはなれた生活が人間性の回復になると考えた人たちがいた。



2種類の紙日時計



切れ端で作った紙日時計

次回は、日本中の日時計、岡山の日時計の話をしてみたいと計画している。

退職記念日時計展

Sundial Exhibition (Memory of Retirement)

小野 行雄 Y. Ono

38年勤めた大学を、今年(2012年3月)無事退職となった。美術系の大学であった事もあり、本人の希望によって、最終授業や出版の代わりに大学の美術館で日時計展を開催した。



東京造形大学附属美術館(東京都八王子市)

2011年10月26日～11月7日の日曜日を除く11日間の期間、800余名の方々にご覧いただいた。

展示は大きく3部門構成で、

1. 世界・日本の日時計(写真パネルと映像)
2. コレクション日時計(携帯型、壁型、レプリカ等)
3. 自作日時計(模型、写真、壁日時計等)とした。

この他には、屋上テラスに人工芝の影法師日時計、身長日時計など体験型の日時計を三基設置した。また、ギャラリートークの日や近隣の小学生を対象とした日時計ワークショップを11月5日(土)の午前・午後の二回開いた。



映像コーナー



世界・日本の日時計写真



コレクションコーナー



自作日時計コーナー

ワークショップ当日は、八王子にお住いの本会会員の奥田氏のご協力をいただき無事終了した。



ワークショップ風景



影法師日時計の体験

10月29日は、関西から後藤会長・押田先生をはじめ、日時計の会の方々に見学していただいた。遠路ありがとうございました。



美術館前にて

なお、この展示会に際し3部門それぞれの小冊子を作り今年の総会でお渡ししました。ご希望の方は小野までお申し出ください。お送りします。

オーストラリアの日時計工房

「Sundial Australia」を訪ねて

Visit to Australian Sundial

沖 允人 M. Oki

はじめに

2010年の4月、南半球の日時計を調査・見学するためにオーストラリア各地を訪れた。出発前に情報を得るために、インターネットで調べた結果、オーストラリアのアデレードに日時計工房があり、日時計の製作をしている。責任者のフォルカード(Dr.Ms.Margaret Folkard)さんは日時計についても造詣の深い人だということが分った。オーストラリアに着いて最初にアデレードの日時計工房を訪ねて話を伺うことができた。以下はそのときのことを簡単に纏めたものである。

工房の責任者

オーストラリアの日時計工房の責任者のフォルカードさんが1976年に同僚への贈り物を検討していたとき、当時の研究者仲間で、現在は共同責任者になっているワード(Jhon Ward)さんに、「日時計がいいじゃないか」とすすめられたことがあり、それがきっかけで日時計工房を立ち上げたという。そして、1977年に日時計工房が本格的に発足した。



写真1 アデレードの日時計工房で筆者(左)に説明するワードさん(右)

フォルカードさんは1984年にチャーチル基金(Churchill Fellowship、1965年になくなった元イギリス大統領チャーチル卿を記念して設立)の助成金を得て、5ヶ月ほどアメリカ、イギリス、スコットラン

ド、ドイツ、オーストリア、スイス、ハンガリー、イタリア、フランス、オランダなどを広く旅行し、日時計を調査した。その後、日時計工房に日時計製作用の工作機械をそろえた(写真1)。フォルカードさんとワードさんは2人とも機械操作をマスターし、フォルカードさんはコンピューターの専門家にもなった。2人ともアデレード生まれで、オーストラリア国防省の研究所で働いていた科学者である。ガス放射、レーザー技術、半導体、結晶成長、薄膜製作などのいろいろな分野で研究を続けてきた。

日時計製作は、直径310mmと400mmの円形の水平型日時計を標準として始めた。設計図と設置者・設計者名、碑文などは厚い型紙に描き、それを鋳物砂に写して鋳物機械で製作する。現在は、写真用重合体(Photopolymer)にし、鋳物砂に貼り付けたあと紫外線をあてて写真用重合体を溶かしてしまう。この方法によって作業は短時間で済むようになった。このため、費用も安価で済むようになった。



写真2 シドニー王立植物園の赤道型日時計

一般からは、円形か方形の水平型日時計の注文を受け、時刻線は緯度・経度を設定し、コンピューターで計算し、自動的に描く。碑文なども刻字し、表面をベルト状になって回転する布できれいに磨く。

日時計の製作例としては、シドニーの王立植物園(Royal Botanic Garden)に設置した赤道型日時計(Armillary Spheres Sundial)(写真2)がある。この高さは2.4m、重さは1.5tである。水平リングには38種のハーブのデザインが彫り込まれている。デザインの彫り込みは、南オーストラリア在住のラン

プ(Karin Rumpf)氏による古代に使用されていた特殊な蠟(Lost Wax)を使う方法によった。赤道型日時計は日時計工房でできる一般的な日時計となっていて高さ 50cm と 80cm のものが製作可能である。

日時計工房はその後、発展し、いろいろな材料を用い、また、いろいろな形の日時計を製作できるようになった。シドニーのキャンベルタウン(Campbelltown)のアナン山の植物園(Mt. Annan Botanical Gardens)にあるような人間日時計(かげぼうし日時計、Analematicdial)(写真 3)の製作も行っている。



写真3 アナン山の植物園の影法師日時計

大司教の住宅であるビショップ邸の壁面に設置したようなステンレスを用いた垂直型日時計(写真 4)も製作している。強度な反射を防ぐためにステンレスの表面は軽くエッチングしてある。スタンドガラスの南面垂直型日時計(写真 5)もメルボルンのスコッチ大学(Scotch College)に設置した。日時計の施主はオーストラリア以外の世界の国々に広がり、これまでに製作した日時計の数は、正確な記録は残していないが、1000 個以上になるという。日時計以外のコンパス、天文儀、日時計のレプリカ、そして、日時計の修復も手がけている。「Sundial Australia」は間違いなく、南半球では一番大きい日時計工房である。フォルカードとワードさんは、これまでの経験や知識、日時計製作の実績を基に文献(1)に示すような著書を出版され、版を重ねている。

私の訪ねた 2010 年 4 月には、フォルカードさんの

自宅に日時計博物館をオープンする準備が進められていた。完成したら、もう一度アデレードを訪れたいと思っている。



写真 4 ビショップ邸の垂直型日時計



写真5 スコッチ大学のスタンドガラスの垂直型日時計

参考文献

(1)Margaret Folkard & John Ward: Sundials Australia, Revised and enlarged second edition, Published by Sundials Australia, Adelaide, Australia, 2008

(2)Douglas Bateman, Folkard and Ward: Sundials Australia, a visit report, The British Sundial Society Bulletin, vol.21(ii), June, 2009

オーストリア・ウィーンの日時計

Sundials at Austria & Wien

沖 允人 M. Oki

・はじめに

2012年9月中旬から下旬にかけてチェコ各地の日時計を列車とバスで訪ねたが、日本からチェコに行く直行便はなく、スイスのチューリッヒ(Zurich)経由でオーストリアのウィーン(Wien/Vienna)に入った。チェコへの往復の基点としたウィーンにしばらく滞在し、ウィーンの日時計を見学した。その際、オーストリア日時計協会の役員に会い、ウィーンの日時計を案内してもらうことができた。チェコでは、フラデック・クラロヴェー(Hradec Kralove)で、チェコの日時計愛好者に会い、1日案内してもらうことができた。チェコの日時計のことは、文献(4)を参照されたい。

・オーストリアの日時計

オーストリアには、2006年1月現在で3341個の日時計がある。内訳は、東部(Niederösterreich, St.Polten, 1015)、北部(Oberösterreich, Linz, 499)、スタインマルク(Steiermark, Graz, 428)、チロル(Tirol, Innsbruck, 570)、ケルテン(Karnten, Wolfsberg, West of Graz, 358)、フォラールベルク(Vorarlberg, Bregenz, 837)、ウィーン(Wien, 120)、ブルゲンランド(Burgenland, Eisenstadt, 67)。



写真1 オーストリア周辺列車路線地図

ウィーンに着いた翌日、オーストリア日時計協会のホフマン(Walter HOFMANN)さん(写真2)が日時計の本『Katalog der ortsfesten Sonnenuhren in Österreich』(Karl Schwarzingler 著・2006,Wien,ドイツ)

語)をホテルに持ってきてくれた。ホフマンさんは、数学の教師でウィーン市内の南部に住んでいるという。オーストリア日時計協会の会員は120名で年に1回会合があり、ドイツ系の人が多く、今年(2012年)は9月20-22日にウィーンの南西にある町で開催されるが発表はドイツ語であるという。

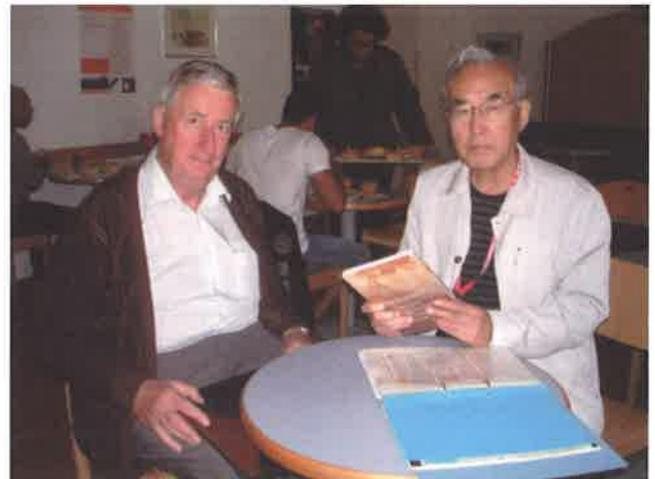


写真2 ウィーンでホフマンさん(左)から本をプレゼントされる筆者
プレゼントされた本は、日本から何故か銀行送金ができなくて、事前に入手できなかったオーストリアの日時計に関する詳しい本(写真3)であった。初版本が発行されたのは、1991年であり、その初版本もいただくことができた。初版本が発行された時の日時計の数は2220個であった。改訂版では3341個に増えている。初版は144頁であるが、改訂版は232頁に増え、日時計のカラー写真が16頁になり、附録としてCD-ROMが附いている。著者のシュバルチンカー氏は1928年にオーストリアに生まれ、グラーツ工業高校(Technischen Hochschule in Graz)を卒業し、1980年頃から日時計の設計・製作をし、オーストリア天文協会日時計研究グループ(協会)(Osterreichischer Astronomischer Verein, Arbeitsgruppe Sonnenuhren)に属している。

協会の役員は下記の3名である。
Mr.Walter HOFMANN <wf.hofmann@aon.at>役員
Mr. Norbert RAINER <norbert_rai@tmo.at>会計担当
Prof.Adi PRATTES<sonnenuhr@gmx.at> 責任者



・ウィーンの日時計

ウィーンには、上記のように約 120 の日時計がある。そのうちの 15 個を今回訪れたが、ここではそのうちの 9 個に付いて紹介する。

・アマリア宮

アマリア宮(Amalienburg)は王宮の西端に位置し、その向かい側にはバルハウス広場を隔てて連邦総理府 (Bundeskanzleramt) が建っている。王宮の建物は、ライプチツヒ博物館(Liptzsner Museum)の北西である。この宮殿は 1575 年から 1577 年にかけてルドルフ大公によって新宮廷として建てられた。



写真 4 アマリア宮の壁面型日時計

ルドルフII世はその後、都をウィーンからプラハに移してしまうと、宮殿はルドルフII世の弟エルンスト大公に引き継がれる。内装は 17 世紀初頭にフィレンツェから呼び寄せられた職人たちによって華麗に飾り立てられた。この宮廷の名はヨーゼフ I 世の未亡人アマリアがここに長く住んだことから付けられた。アマリア宮の建物の機械時計のある下方の壁面に長方形の壁面型日時計(写真 4)がある。日時計は比較的最近の 1998 年に設置され、ルネッサンス時代の壁面に直接描かれている。

・アウグストナー通りの建物

次にアウグストナー通り (Augustnerstrasse, Abbey of the Augustner countryyard)のライプチツヒ博物館の南約 200m にある建物の、橙色のフレスコ画が描かれた壁の壁面型日時計(写真 5)を見る。鉄製の棒のノーモンが付いている。1773 年の製作である。



写真 5 アウグストナー通りの壁面型日時計

・聖ステファン寺院

聖ステファン寺院(St.Stephen's Cathedral)南のバットレスに、地上から 12m ほどのところに垂直型日時計(写真 6)がある。U 字形の輪郭で 80 x 80cm とあまり大きくはない。砂岩(Sandstone)で作られている。ウィーン大学(Viena Univ.)のポオイエルバッハ (Georg von Peuerbach)教授が 1451 年に製作したというがオーストリア日時計協会の日時計カタログでは 1554 年になっている。最近、2003 年に改修された。



写真 6 ステファン寺院のバットレスにある垂直型日時計

この日時計はオーストリア日時計協会のロゴマークにもなっている。

・シェーンブルン宮殿・植物園

地下鉄でシェーンブルン(Schonbrunn)宮殿に行く。地下鉄のシェーンブルン駅から約 1km 歩いて宮殿の入口に着く。大勢の観光客であふれ、観光バスもずらりと並んでいる。有名な王宮と巨大な庭

園である。

日時計の場所を係員に聞くと、多分パルメン・ハウス(Casa de las Palmeras、温室)のあたりにあると思うがと、はっきりしない。ただし、宮殿を見学しないなら無料だから行ってみてくれという。



写真7 シェーンブルン宮殿・植物園の赤道型日時計

右手にまわり、宮殿の裏に出て右手のほうに歩くとそれらしいものは無い。向こうの高台になったところにグルリエッテ(Gloriet)という彫刻群があり、日時計がありそうな気配であったが、少し登りもあるし、かなり遠いので、日時計があるかどうか確かめてからと思い、売店の人に聞いてみたが「知らない」という。多分、日時計なら、庭園の東端に近い、地下鉄でもう一駅先あたりではないかという。天気がよく、太陽が燦燦と照り付ける中を木陰を選んで歩く。30分ほど歩いたが日時計は見付からない。ジョギングしている女性を止めて聞いてみたが、見たことはないという。ともかくシェーンブルン駅の一駅先のヒーチング(Hietzing)駅まで行くことにし歩いていると、子供連れの女性に出会ったので聞いてみた。温室の辺ではないかという。

左手の開けたところに目指す日時計があった。直径1mほどの白色の文字盤の赤道型日時計(写真7)である。シュー(Georg Schuh)によって設置され、2004年に改修されたと名盤に書かれている。均時差のグラフも付いている。その奥に高さ15mほどのガラス張りの2棟の大きな温室が見えている。あたり一面、美しい色とりどりの花壇が芝生の合間に作られ、ベンチも幾つもあり、右手の遠くには尖塔が高く聳えて、心なごむ美しい風景の中に日時計があった。

・レーナー研究所

アム・ショヴェーク(Am Schwek)駅で下車し、キースプラック(Kheesepltz)通りに向かって交差点をそのまま進むと休憩用のベンチが沢山置いてある教会のすぐ後ろの12番地にレーナー研究所(Renner Institute)がある。その建物のあまり高くない位置に長方形の壁面型日時計(写真8)がある。ここは以前は学校(Former Augustinian's manor)であったが、現在は政党(Social Democratic Party)の研究所(Political Academy)になっている。



写真8 レーナー研究所の壁面型日時計

・「日時計通り」のビル

電車の駅まで戻り、57番のバスで「日時計通り」(Sonnenuhrgasse)近くのバス停で下車する。通りはすぐに分かったので歩いてみると50mくらいで行き止まりとなった。また戻って探したが見付からない。バス停に日本人の女学生が来たので尋ねてみると携帯電話のGPSで検索してくれ、教会(Gustav Adolf Kirche)の近くにあるという。



写真9 「日時計通り」のビルの二面壁面型日時計

バス停の前にそれらしい教会はあったが、日時計はない。通りかかった地元の女性に聞くと、「日時計通り」はこの通りだという。ふと見上げるとビルの角に二面壁面型日時計(写真 9)があった。バス停前であつた。簡単な日時計で鉄線のノーモンが付いている。1876 年の製作である。

・AKH 大学病院前庭

地下鉄で病院前の駅まで行く。タクシー乗り場の近くの芝生の真ん中に円形の、ブロックが敷き詰められた中にコンクリート製のベンチがあり、その真ん中に高さ 1m の円柱のコンクリートの台の上に高さ直径約 1.2m の真鍮製の地球儀型日時計(写真 10)がある。あまり正確でなく、頑丈でもない。モニュメントとして 1990 年に設置されたものだが、日時計の周りはかなり汚れている。オーストリア日時計協会発行の日時計の本の説明よると時刻は正確に示さないという。



写真 10 AKH 大学病院前庭の地球儀型日時計

・シモンガッセ博物館

暑くなって疲れもでてきたが、もう 1 つ日時計を訪ねることにする。地下鉄 6 号線の終点の駅で下車し、駅前から 26 番のバスに乗り、終点のカグラン(Kagran)に着く。午後 1 時にカグランから 26A 番のバスに乗り換え、エスリング(Essling)に約 25 分かかって着く。バスの運転手の教えてくれたように、交差点を左に入り、麦畑のほうにカーブしている道を日時計のあるという方向に歩く。左側は樹林と畑、右側は広い住宅団地になっていて日時計がありそうな気配はない。車で通りかかった人に聞いて

たが知らないという。しかし、近くのレストランの人なら知っていそうだと一緒にそのレストランに行って聞いてくれた。幸いレストランの主人が日時計の場所を知っていて、詳しく教えてくれた。徒歩で 10 分ほどかかるという。教えられたとおりに歩いて行くとエスリング・シモンガッセ(Essling Simongasse)通りの 22 番地の、樹木の茂った中に 2 階建ての大きな白い建物があり、その壁の 2 階と 3 階にかけての壁面に 2m x 2.2m くらいの大きな四角な壁面型日時計(写真 11)があった。



写真 11 シモンガッセ歴史博物館の壁面型日時計

白い建物は博物館(Historical silo(granary))になっているが 4 月から 10 月までの日曜日の 10 時から 12 時までのみ開館すると、小さな看板が入口にでていた。

日時計には、農婦が麦畑で仕事をしている絵が描かれている。絵の中央にある太陽神の口から細い線状の、長さ 1m ほどのノーモンの先端に球が付けられていて、下部に黒色のローマ数字の時刻盤があり、夏至の線と時刻線が引かれている上に球の影ができ、時刻を読み取るようになっている。

日時計の下部には「Anno MCMXCI」と書いてある。この日時計は 18 世紀の製作だが、1991 年に修復されたという。

・ハルドガッセ通りの小公園

翌朝、午前 9 時にホテルを出て地下鉄 4 号線のスピッテラウ(Spittelau)駅に着き、ビルロート高速道路(Billrothstrasse)を陸橋で横切る。橋下には幾つもの道路が造られ、車がそれぞれの道を疾走している。

陸橋を渡り、坂道を登り、ハルドガッセ(Hardtgsasse) 通りに進む。16番地近くの団地のはずれに、三角形のような薄緑色に塗装された高さ約2mのセラミック製の変形ノーモンのある大きな水平型日時計(写真12)があった。直径6mの文字盤は橙色と白色できれいにデザインされている。

1958年に設置され、2005年に改修された。



写真12 ハルドガッセ通りの小公園の水平型日時計

機会があれば、再びオーストリア各地にある日時計を訪ねる旅がしたいほど、美しい街並みばかりであった。

参考資料と文献

(1)Arbeitsgruppe Sonnenuhren im Osterr. Astronomischen Vereins, Gnomonicae Societas Austriaca(GSA) (オーストリア日時計協会): <http://www.gnomonica.at/>

(2)Category:Sundials in Austria: http://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Sundials_in_Austria

(3)CMRS(centre mediterrani del rellotge de sol-地中海センター): 本部はスペインのバルセロナにあり、2008年に発足した世界規模の日時計愛好家の集まりで、情報は充実しており、言語は、スペイン語はもちろん、英語、独語、仏語など30ヶ国語に翻訳できる。あまり充分ではないが日本語もある。
<http://rellotgesdesol-cmrs.org/index2.php?idioma=english>

(4)沖允人:太陽をめぐる日時計の旅・チェコ日時計の旅、第20話・最終回、照明、日本照明器具工業会、第13巻、第4号、pp.8-17、2012年11月



写真18 オーストリア 州と主都

ルーヴル美術館の日時計

* 階の表示に注意

日時計の展示場所は4~5か所に分かれているが、多くのコレクションを見られる。

- ・ルネッサンス期: リシユルー1F、23室
- ・17~18世紀オブジェ: シユルー1F、46室
- ・エジプト: シユルー入口階、6室
- ・ギリシャローマ: ドノン入口階、11・23室



パリの日時計

Sundials at Paris

小野行雄 Y. ono

2008年3月21日から31日まで、当会会員の鷲見氏と共に、フランスの日時計の調査に出掛けた。日程の前半はイタリア国境に近いブリアンソンを、後半はパリ及び近郊のシャルトルを訪れた。

後半の26日夕方、パリ19区のホテルに到着、翌朝ホテルに、連絡しておいたフランス天文学会(SAF)日時計部会のアラン氏(2003年開催のオクスフォード国際日時計会議でお会いした方)とエヴェリン女史が訪ねて来られた。早速、地下鉄を利用しながらパリの日時計を案内していただいた。

1. Perrée 通りの日時計



3区街角の日時計

3区、Perrée 通りの角にある8階建ての建物の南角の石造日時計は、20世紀初頭ベルエポック期に作られた。時刻は午前8時から午後8時まで表示されているが、多分朝は10時にならないと陽が射さない。この日は早朝訪れた為、日時計面にまだ太陽があたらず時刻を確認できなかった。。

上下に、曙と黄昏の女神の彫刻を配して、当時の華やかさが伝わってくる。

石の彫刻は Jules Louis Rispel 氏の制作。

2. Vins 邸 中庭の日時計



中庭の日時計

1区、J. J. Rousseau 通りの Vins 邸中庭の日時計は18世紀中頃の制作で、パリでは珍しくフレスコ画で出来ている。左棟屋上のペントハウスの様子から考えると、近年増築されたようで、このため現在では日時計の位置および時刻表示に無理があるように感じる。しかし夏の午前中は良く確認できるのではないだろうか。

3. グリュニー美術館の壁面日時計



階段室外壁の日時計

5区、ガリア時代のローマ遺跡の上に建設され、現在は中世の品々を展示するグリュニー美術館の南側階段室外壁には1674年制作の日時計がある。

石壁をスクラッチしただけのシンプルな加工であるが、壁面の方位が真南からはずれていることを上手く利用して、大小2本のリボンを傾けて用い線描きのみで品良く作られている。また、この日時計の少し右側の外壁にも半円の日時計がある。イギリスの古い教会などで散見される一種のスクラッチダイヤルと考えても良いと思う。

4. サルヴァドール・ダリの日時計



ダリの日時計

5 区、Saint-Jacques 通りには、画家のサルヴァドール・ダリが、友人の家具店開店を祝って1968年に贈った日時計がある。

この日時計は、顔をモチーフにしているが、実はホタテ貝の形からきており、近くにあるサン・ジャック教会を一つの起点として、スペイン北部最西端のサンチアゴ・デ・コンポステラ〈聖ヤコブの埋葬地〉への聖地巡礼のしるしとしての意味がある。ちなみに、巡礼者は首からこの貝を下げる習慣があり、また、巡礼の道々、このマークが聖地へと案内してくれる。

5. 光ファイバーの日時計



レ・アルの日時計

1 区、旧パリ中央卸売市場跡地レ・アル (Les Halles) の公園に設置された日時計は 1989 年に作られた。左側の黒い塔の側面に、多数の太陽光入射口があり、ここから光ファイバーを用いて、右側のカーブを描いた土手面に向かった時刻ラインの上端の穴を光らせて時刻を表す。

6. オベリスクの日時計



コンコルド広場の日時計

紀元前 1250 年頃、ラムセスII世によって建てられたルクソール神殿の対のオベリスクの1基は、1833 年エジプト政府からフランスに贈られた。その後このオベリスクは、ルーヴル美術館とエトワール凱旋門の軸線上のコンコルド広場に設置された。

20 世紀に入り、このオベリスクと広場全体を日時計にしようという動きは何度かあったが二度の大戦で流れ、最終的に 1999 年やっと実現した。オベリスク先端の影で時刻を知る形式の水平型日時計である。

ここを訪れる多くの旅行者は、広々としてオベリスクが聳え立ち、その先にエッフェル塔を望む絶景に、眼を床に向けるはずもなく、ましてオベリスクが日時計の針と思うはずもない。

写真では舗道に画かれたライン上に XVI (16 時) の逆向き表示が読める。

7. ソルボンヌ校中庭の日時計



中庭北棟4階

5 区、パリ大学ソルボンヌ校中庭の日時計は最初

16 世紀中頃に作られた。そして現在の日時計は 1876 年の修復を経て 1899 年に完成した。

上部には太陽を乗せた古代の戦車と女神達、下部には二人の天使が中央の地球儀を計測している華麗な金色のレリーフがある。

18 世紀、フランスは子午線を基にメートル法を作った。アーチの上枠には、“我々の日々は影の如く過ぎ去る”との格言が記されている。因みに、日本は 1886 年にメートル条約に加盟している。

8. アンヴァリットの日時計



中庭 西向き面の日時計

ナポレオン・ボナパルトの霊廟で有名なアンヴァリット (Les Invalides) の中庭は、南向・東向・西向の建物外壁の切妻面に日時計が作られている。

写真はその一つ、西向面の日時計には月を表す黄道十二宮のシンボルが描かれている。

左右同じ形式であるが、向かって左の柱は一日が夜明けから始まるバビロニア表記、右は日没から始まるイタリア表記になっている。

9. シャトル大聖堂の天使の日時計



南角の天使の日時計

パリの南西、シャトルの町は聖母マリア崇拜の聖地として 4 世紀頃から栄えていたようだ。その中心、ノートル・ダム大聖堂は幾度かの火災・改修を経て、16 世紀頃に現在の形になった。

南西―北東の軸線で建てられた大聖堂の南角には天使の日時計がある。ダイヤルの上端に 15□8 年の記述があり、時刻はローマ数字で表記されている。彫刻と相俟ってバランス良く、秀逸である。

SAF 日時計部会を訪問

3月27日の夕方、フランス天文学会 (SAF: Societe astronomique de France) を訪れる。アラン氏のご紹介で、日時計部会のチーフのメンバーとの記念写真や、双方の日時計事情の情報交換を行った。



写真は右から、SAF 事務局の方、エヴェリン女史、アラン氏、鷲見氏、SAF 会長の Ph.Sauvageot 氏、筆者の順。

今回のフランス日時計の旅では、短い期間ということもあり、見学地を二箇所限定した。フランス・アルプス地方の小都市のブリアンソン、大都会のパリ、両極端ではあるがそれぞれの環境を表した日時計たちは実に特徴的であった。このレポートはパリの報告とした。

今後も、世界の日時計仲間たちと連絡を取りながらまだ訪ねてないヨーロッパをはじめ、世界の日時計を見学したいと思う。

〈参考文献〉

- ・「Cadrans Solaires DE PARIS」 CNRS ÉDITIONS
1997 A. Gotteland, G. Camus 共著
- ・「パリ Paris」 グリーンガイド Michelin 1994

続 球形日時計

Globe Sundial 2

奥田治之 H. Okuda

・はじめに

前号（ひどけい 第8号）では、球形日時計の基本的アイデアといくつかの試作品の紹介をしたが、その後の改良、発展について紹介する。

・いくつかの改良

前号で紹介した試作品では、時刻盤のアナレンマを描くのに、テンプレイトを使って手書きで行ったのであまり見栄えのしないものであったが、今回は、パソコンを使って印刷した。印刷用紙には、耐水性で接着材の塗布された透明シートを使った。これによって、鮮明なアナレンマになって読みやすくなり、また、精度も向上した。12時に対応するアナレンマには、各月の1日に、太陽像が通過する点を示して、季節の変化も読み取れるようにした。図1にその例を示した。ただ、この場合、平面上に印刷されたものを、球面上に貼り付けるので、ひずみが出て多少の浮きが出るのが難点である。NCを使ったレーザー刻印などが出来れば理想的であるが、単品ではこのような加工をしてもらえるところが見つからない。

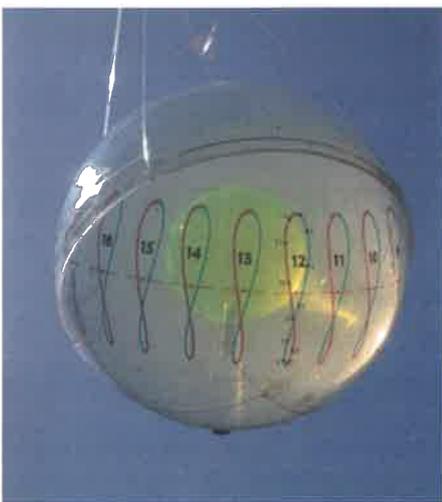


図1 球形日時計

中央のプラスチック球を取り巻く液体には、水を使い、それに少量の散乱体を混ぜて収束する光線が見えるようにしているが、現在は、それに、

フローリング床のつや出し用のワックスを使っている。この散乱体は、粒径が小さく、レイリー散乱特性を示し、理想的であるが、長期間の使用で、レンズや外球の内面にかすかに沈着するのがやや煩わしい。沈着速度を遅くするため、溶媒を水から水性アルコール（洗濯糊）に変えてみたりしたが、粘性が高いたけに取り扱いづらい。これは、最終的には、後で述べるように、レンズとそれを取り巻く光学媒体をすべて固体にしてしまうことが考えられる。

・変形型球形日時計 半球日時計

球形日時計は、完全球対称で時刻、季節に関わらず、完全に等価の性格を持っていて理想的なものであるが、中低緯度で使用すると、夏期の太陽高度が高い場合、太陽の焦点像が、球体の下側に結像するため、日時計を下側からのぞき見る姿勢を強要されるので見づらい。そのため、この日時計は中空に浮かせて設定する必要があり、安定性を欠くことになりがちである。この点を改良するために、次のような変形を考えついた。

今、球形日時計の中心を通る平面に鏡を置いて、入射光束をそこで反転することを考える。この場合反射した光束はもとの光束と鏡像関係に完全に等価である。図2

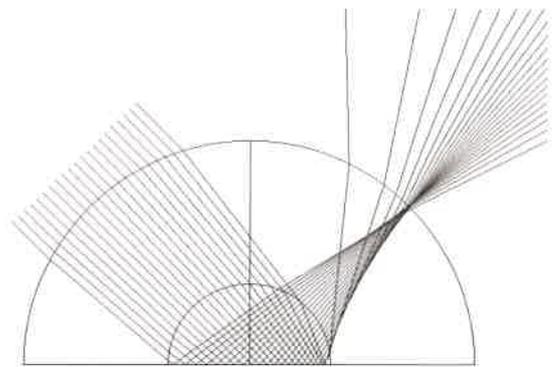


図2 半球型日時計の光線追跡図

こうすれば、下面に出来た太陽像を上面から見ることが出来て、自然体で観察することが可能になる。ただ、これを実現するためには、中心球(レンズ)を半球にする必要があり、既製品では入手

が難しい。市販品では、直径、30mm, 50mm など特殊なものがあるが、その他のものは全球を二分割して作るなどしなければならない。半球レンズさえ手に入れば、平面部を鏡にして(平面鏡を置くか、あるいは、直接アルミ蒸着を施すなどで実現する)、これを水の半球で囲めば球形日時計と等価の日時計が出来上がる。図3



図3 半球型日時計の例

時刻目盛は、球形の時と同じアナレンマ模様を貼り付ければよい。こうすれば、窓際の机などにも置いて、気軽に時刻を読むことが出来て便利になる。

球形日時計では、外球の表面に、アナレンマ時刻線以外に、世界地図を書き込んで(刻印)しておけば、その時々、太陽が天頂にある地点の位置を指し示すことが出来る。もちろん、地図は、南北反転したり、東西が反転したりするので、配置には注意する必要がある。図4



図4 時刻盤の上に世界地図を重ねたもの

このように、球形日時計や、半球日時計では、季節によって、光点の回る位置が変わって、季節

の移り変わりを実感できるのも楽しい。

なお、希望するサイズの半球レンズを市販で入手することは難しいが、次のように容易に手づくりすることが出来ることがわかった。まず、希望するサイズの球体(たとえば、ベアリングに使用されている鋼球)を型にして、半球の型をシリコンゴムなどで作る。これに、市販されている、2液性の透明樹脂を流し込んで固化させて半球状のレンズを作ることができる。

球形日時計にしる、半球日時計にしる、外側の光学媒体に水などの液体を使うと、液漏れや、破壊、また、散乱体の沈着などに神経を使わなければならない、嬉しくない。これを屈折率の異なる二種類の固体に取り替えるとこれらの問題が一挙に解決される。この場合、中央に置くレンズの屈折率は、外側のプラスチックの屈折率(普通1.4程度)より高い物質を選ばなければならないが、これがちょっと難しい。高屈折率のフリントガラス(屈折率1.6)なども候補になるが、これで希望の球、または、半球を入手することは難しい。最近、思いついたことであるが、この頃、眼鏡のレンズがほとんどプラスチックに変わっているが、そこでは、出来るだけ、薄型にして、収差を少なくし、また、軽くするために、高屈折率のプラスチックが使われている。屈折率が、1.6以上のものさえあるようだ、もしこのようなプラスチックの重合材が手に入るようならば、これを、前述の手法(モールドを作って自作する)で作ることが出来るかも知れない。こうすれば、完全に固体だけの球形、半球日時計が作れることになり、水漏れ、破壊などの心配が要らなくなる。また、混入した散乱体の選択にも自由度が増し(比重の大きい固体微粒子、色つき微粒子などの使用)さまざまな趣向が凝らされるようになる。

・その他のアイディア

反射型日時計

〈反射球を使ったもの〉

反射球を太陽光にさらし、極軸方向からのぞき込むと、太陽の反射点は極点を中心に円弧上を1時間に15度ずつ回転していく。これなら極点か

ら放射状に時刻目盛りを打っておいて太陽の反射点の位置を読んで時刻を知ることができる。反射点の移動する円の半径は季節によって変化して、北極方向から見たとき、夏は小さく、冬は大きい円を描く。従って、その位置から季節の変化を読み取ることもできる。図6

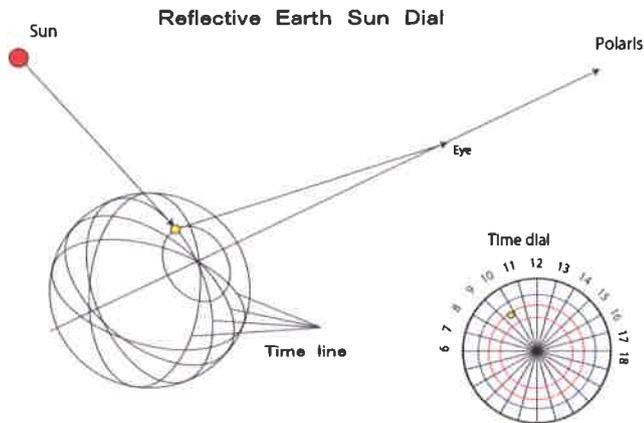


図6 反射球日時計の原理図

反射球は必ずしも、完全反射体でなくてもよい。太陽光線は強力であるので、部分反射でも十分反射点を確認出来る。たとえば、透明なプラスチック球を使うこともできる。この場合、反射率は数%程度であるがこれで十分である。また、透明であることを利用して、時刻盤を球の内部に置いて透かして、反射点の位置を読むようにしてもよい。

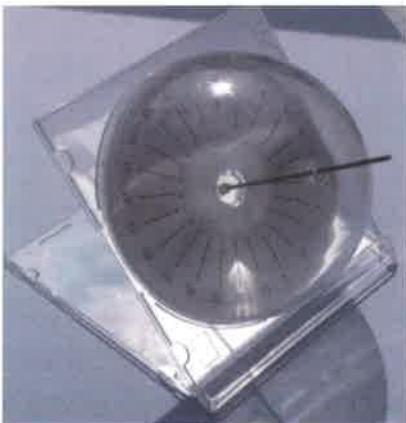


図7 透明なプラスチック球を使った日時計

この円板に、北極を中心にした正距方位図法の世界地図を描いておけばそこに投射された反射点の位置は太陽が天頂に来る地点を示す(球の直径に比べて十分遠い距離から見た場合)。一例を図8に示す。



図8 透明な半球を反射面にし、内側の赤道面に正距方位図法で描いた北極を中心にした世界地図を置いたもの

なお、この日時計は南極側から見てもよい。一つの反射球を空中に浮かせて設置し、その高さを適当に設定すれば、背の高い大人は北側から反射球を見おろして時刻を測り、背の低い子供は南側から反射球を仰ぎ見て時刻が読めるようにもできる。公園のモニュメントとしても面白い。

〈CD ディスクの干渉を利用したもの〉

CD ディスクには、同心円状(実際は螺旋状)の細隙が掘られており、これによって美しい虹色の干渉光が見える。グリッドは円形状であるので、干渉光は、入射光に平行な直線上にできる。従って、CD ディスクの軸を極軸にあわせて設定して、極の方向から眺めると、太陽方向に向かった直線状の干渉光が見える。この方向を円盤に沿って15度おきに打った時刻目盛りで読めば、時刻を知ることができる。一種のこま型日時計であるが、時針が美しい虹色に輝くのがよい。図9



図9 CDディスクの円形グレーティングを利用した日時計

こま形日時計では、春分、秋分で時刻面が表、裏に変わるのがやっかいであるが、録画用の CD ディスクのセットを買うと透明なディスクが入っていることがある。これを使えば、裏側の干渉光の線も見ることができる。図 10 また、正確な時刻を読むには、極軸方向からみる必要があるが、中央部に小さな鏡を貼り付けておけば、自分の目が映る位置で見れば条件を満たすことができる。

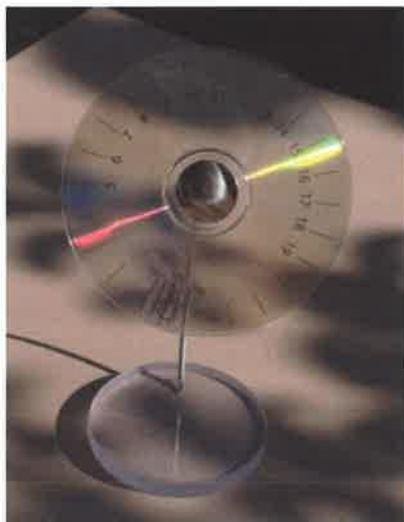


図 10 透明な CD ディスクを利用すれば、裏側の干渉縞も表から見える。

また、CD ディスクの場合は、円形グリッドの幅は一定であるため、干渉光は見る方向が決まれば一色になってしまうが、これを適当に変化させれば、美しい虹色に分散させてみせることも原理的にはできる。

以上、新しいアイデアの日時計をいくつか紹介した。いずれも、誰でも思いつくようなものであり、すでにどこかにあるものかも知れないが、興味を持っていただける方もあるかと思って紹介してみた。

なお、球形日時計の設計では、ジェネシアの武山芸英氏に光線追跡の計算でお世話になり、半球日時計では、清原光学の清原氏から表面反射鏡の提供を受けた。また、その他、東京造形大学の小野行雄先生、宇宙研の横田力男氏、成田正直氏、阪本成一氏にはいろいろな形でお世話になった。紙面を借りて皆さんに感謝したい。

隅田川日時計散歩

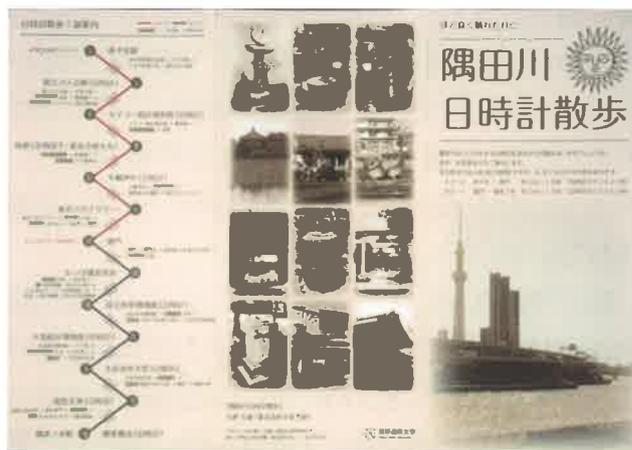
Sundial-trail at Sumida-river

小野行雄 Y. Ono

インターネットなどで海外の日時計スポットを探していると、都市の地図と共にオススメ日時計散策ルートを見つけることができます。そこでは、日時計の小さな写真や簡単な情報も知ることができます。これは異邦者にとって非常に便利です。そこで、日本でも作れないかとおもい、比較的狭い地域で様々な日時計が観られる上野を中心にした場所を選び、印刷物として試作しました。

御茶ノ水から始まり、湯島天神、不忍池弁天堂、大名時計博物館、国立科学博物館などの日時計スポット、また南千住の汐入公園から、セイコーミュージアム、牛島神社という隅田川沿いのスポットとを浅草で繋いでみました。

最近の熟年散歩への提案として、下のような B4 プラネットを作ってみました。まずは日本語ですが、いずれ英語も併記し、またインターネットにも載せたいと思っています。



追悼・澤路雅夫さん

In memory of Dr. M. Sawaji

沖 允人 M. Oki

北米・シアトルの日時計調査を終えて2011年4月7日に帰国した後に、8月に開催される予定である北米日時計協会の日時計集会案内状が送られてきた。早速、会員の数人に知らせた。澤路さんにも知らせた。ところが、ご家族の方から、澤路さんが4月6日に天寿(享年91歳)を全うされたという思いもかけぬ連絡があった。私の帰国した1日前であった。澤路さんの設計・設置されたユニークな日時計を国際的に知らせる良い機会であったのにと、残念でならない。

澤路さんが日時計の研究や製作を始められたのは、大学を定年退職された後の1989年、70歳のときであった。2001年に自宅の庭に、大理石で水平型季節日時計、黒御影石で赤道型季節日時計を恵那市の田口石材の協力で製作・設置された。それ以後、自然石や干曲の石を試用した創作日時計を精力的に設計・製作された。

上田城趾公園(13°傾斜型日時計・写真2)、諏訪東京理科大学(13°傾斜型日時計・写真3)、上田市・芳泉寺(上田城主ゆかりの寺)(60°傾斜型日時計・写真4)、上田市・信州大学繊維学部(60°半円筒傾斜型日時計・写真5)(上田市大宮石材協力)に、いずれも石材を使用した頑丈な日時計を製作・設置されている。

私が澤路さんと初めて会ったのは、2006年に足利市の「生き街工房α」で「世界の日時計展」を行ったときであった。その後、新しい日時計を考案されるたびに連絡をいただいたり、作品を私の足利工業大学の「日時計の部屋」に寄贈していただいたりした。日時計の総会には、何時も試作された日時計持参で出席し、熱心に説明されておられたので、温厚なお人柄に接した会員も多いと思う。晩年は、日時計を生きがいにしておられたようだ。一方、趣味の溪流釣り、特に岩魚釣りにも熱心で、お会いするたびに、河原を飛び歩くので足腰には自信がありますと自慢しておられた(写真1)。

澤路さんは1919年(大正8年)11月25日に長野県南佐久郡小海町でお生まれになり、東京物理



写真1 2010年4月10日、お孫さんと溪流釣り学校(東京理科大学の前身)理化学部を昭和17年卒業された。その後、信州大学繊維学部を定年まで勤められ、続いて、長野県立女子短期大学(長野市)、信州短期大学(佐久市)で教鞭をとられ、ここも定年まで勤められた。そして、信州大学と信州短期大学からそれぞれ名誉教授の称号を授与され、国からも勲三等旭日中綬章を授与されておられる。この間に、東京大学から工学博士の学位を得ておられる。没後は従四位を授与された。ご専門は、電子工学で、大学では計測工学・電子工学・電子計算機・情報工学などの講義をされた。

上田市中央北にある天照山大輪寺の墓地に埋葬され、戒名は「碩光院昭量雅道居士」という。澤路さんは天寿を全うされ、この世で再びお会いすることはできないが、残された日時計によって永久に澤路さんを偲ぶことができるのは、せめてもの幸である。澤路さんの日時計に刻まれている碑文は「真理は逃げない」である。澤路さんは、今も天国で日時計のことを熱心に話しておられるのではないかと思う。

合掌



写真2

上田城趾公園(13°傾斜型日時計)



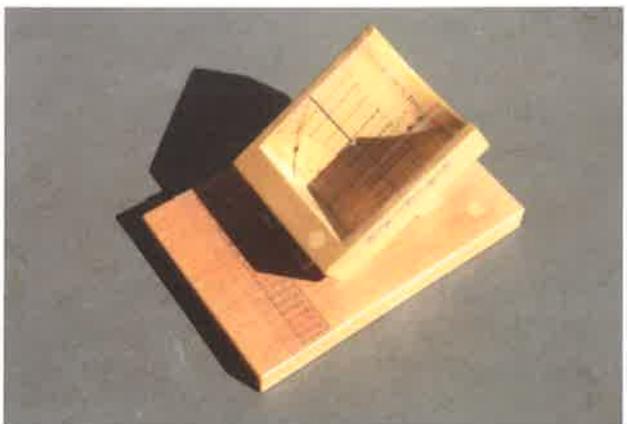
写真3 諏訪東京理科大学(13°傾斜型日時計)



写真4 上田市・芳泉寺(60°傾斜型日時計)



写真5 上田市・信州大学繊維学部(60°半円筒傾斜型日時計)



木製半円筒傾斜型日時計(東京用)

追悼・山岸伸一さん

In memory of mr. S. Yamagishi

小野行雄 Y. Ono

本年 4 月の日本日時計の会総会開催のご案内をお出ししましたところ、奥様よりお電話がありまして、3 月 8 日に山岸氏がお亡くなりになった由、お聞きしびっくりいたしました。



美並村にて



平城宮再現製作鳳凰像

本会の設立準備の会合が、1999 年 6 月 26 日に岐阜の美並村(当時)・日本まん真ん中センターで開かれました。この最初の集まりに、山岸さんが参加してくださいました。

山岸氏ご自身は、日時計を調べたり作ったりしませんが大変興味をもたれ、ご専門の鑄金の立場から、実製作をサポートしようとお気持ちで参加られたのではないかと私は感じました。

或る時、山岸さんから私の家にロストワックスと金ベラが届き、小品日時計のモデリングをしてみないかとお誘いがありました。上手に出来れば鑄金で作ってもらえたのですが残念ながら試作まで行きませんでした。

氏は、昭和 33 年に、東京芸術大学彫刻科を卒業、引き続き昭和 35 年、同大学彫刻専攻科を終了されました。学部の頃から彫刻鑄造を学び、卒業後は、国宝級の多くの文化財の修復・模造に従事されました。また昭和 49 年には、東京武蔵村山市に山岸鑄造工房を開設され、写真のように平城宮再現製作鳳凰像なども手掛けられました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

日本日時計の会 会則

1. (名称)

本会の名称は「日本日時計の会」とする。

英語名は「The Japan Sundial Society」とする。

2. (目的)

本会は広く日時計の知識の普及と啓蒙をはかり、日時計に関心を有する会員相互の情報交換ならびに親睦を目的として、次の活動を行う。

- ① 日時計の学術研究の奨励
- ② 既存の日時計の記録・調査
- ③ 日時計の設置・維持・修復の助言
- ④ 外国の日時計団体との交流

3. (事業)

本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。

- ① 年1回の総会の開催
- ② 見学会、研究会の開催
- ③ 会報誌の発行
- ④ その他必要と認められる事業

4. (会員)

会員は日時計に関心を持つ個人又は法人とする。

5. (役員)

本会に次の役員を置く。

- | | |
|------|-----|
| 顧問 | 1名 |
| 会長 | 1名 |
| 副会長 | 1名 |
| 幹事 | 若干名 |
| 会計監査 | 1名 |

6. (会の運営)

会長は本会ならびに幹事会を代表して本会を運営する。

幹事会は会長・副会長・幹事より成る。

7. (役員の任期)

役員任期は2年とする。ただし再任は妨げない。

8. (会計)

- ① 本会の経費は、会費及び寄付金を以ってこれに充てる。
- ② 会計年度は4月1日から翌年の3月31日までとする。
- ③ 会長は会計監査を受け、会計報告を行う。

9. (総会の成立)

総会の成立には、委任状も含め会員の2分の1以上の出席を必要とする。

総会の議決は、総会出席者の過半数を以って決することとする。

(附則)

1. 会費 学生会員は年1,500円、個人会員は3,000円、法人会員は10,000円。
2. 会報の名称 「ひどけい」又は「ヒドケイ」とする。
3. 会費・会員管理、カタログ・文献、ひどけい編集を分担する。

●会員情報 membership information

スペイン在住の芸術家・又木啓子氏の個展が、11月3日～25日まで、東京調布市仙川のプラザギャラリーで開催されました。“オーロラ”をテーマに100号2点と小品によって、会場全体が一つの作品として構成されていました。

10日、沖ご夫妻と小野でお伺いし、パーティーも参加してきました。(小野記)



●書籍・映画情報 sundial information

お薦めの本をご紹介します。以下は角川書店の宣伝文からの引用。“寛永16年(1639年)江戸幕府碁所・安井算哲の子として京都で生まれる。承応元年(1652年)、父の死によって二世安井算哲を継ぐ。囲碁の研鑽の一方で天文・数学・暦学などを学び、21歳の時に各地の緯度を計測して、当時用いられていた誤差のある宣明暦からの改暦を申し出る。申し出ること三回、ようやく朝廷に採用され、春海がつくった新しい暦は、貞享暦として後の太陰暦の基本となる。その功により貞享元年(1684年)碁所をやめ初代幕府天文方に任じられる。正徳5年(1715年)77歳で没。”

江戸時代が舞台の小説には珍しく天文学・暦をテーマにしています。映画では、最初に日時計のシーンが映ります。(小野記)



●編集後記 editor's note

- ・今年4月、二年ぶりの総会が開かれ、会員の皆様のお顔を拝見することができ、ひと安心でしたが、前回の総会以降、3名の会員の方々が亡くなられ非常に残念に思うところです。
- ・現在、日時計カタログ情報“Sundials List in Japan : 日本の日時計表”を沖允人氏が編纂しております。来年の4月をめどに出版を計画しているとのこと。本来、日本日時計の会としてしなければならない事業です。氏からは、本に“日本日時計の会”の名称を使用したいとのご希望が寄せられております。発行が待ちどおしいです！
- ・総会でお約束しました“会報”の9月発行が12月になってしまったことをお詫び申し上げます。今まで鷺見氏にお願いしておりましたが、非常にご多忙とのことで無謀にも小生がお引き受けし、編集にあたりました。どうして良いのか分からず暗中模索の毎日でした。稚拙なところは(全て?)はご容赦ください。9号に関しまして、会員諸氏のご意見をお寄せいただけますと幸いです。ご意見を参考にしながら、より良いものにしてまいりたいと思います。
- ・本第9号は、オンデマンド印刷の全頁4色刷りとしました。今後もこのスタイルで発行の予定です。常時、会報への投稿を受け付けております。投稿される原稿や写真はカラーで載りますのでよろしく願いいたします。(小野記)

J S S

THE JAPAN SUNDIAL SOCIETY